

植物に助けられた震災復興の取り組み

天川 佳美

まちづくり有限会社 きんもくせい

Plant-Supported Recovery Works Following Earthquake Disaster

Yoshimi AMAKAWA

Community / Communication / Co-operative Space KINMOKUSEI

13年前の1995年1月17日午前5時46分、震度7.3(±0.2)の地震が発生しました。

私は会社の一事務員でした。私が仕事をしていた事務所は神戸市灘区楠丘町にあり、昭和4年に建てられた2階建ての木造建築でしたが、全壊しました。地震で家屋が崩れたガレキの跡には花がいっぱい供えてありました。私はこの状況の中で今、一步踏み出すことが必要だと思いました。それは、まずガレキ跡に花を咲かせることでした。

1. ガレキに花を咲かせましょう

5月になり、やっと復興の気力がでてきた頃、まずは空地になってしまった所に花を咲かせ、復興への第一歩としようと、「ガレキに花を咲かせましょう」を始めたのです。

大震災のおよそ10日後に結成された「阪神大震災復興市民まちづくり支援ネットワーク」のメンバーに呼びかけ、種まき隊の最初のメンバーが集まりました。

5月27日、壊れてしまったわが社の跡地に40人ばかりが集まって最初の種まきをしました。第一園芸の専門家2人が参加してくださり、その指導のもと、土と肥料・コンポストを配合し種まきをしました。大破した鷹匠中学校は一時避難所になっていましたが、その周りの荒地にも種子をまきました。

翌28日には、神戸市長田区の鷹取地区大国公園でも、第一園芸の2人に種まきの趣旨と具体的な作業について説明してもらい、地区の住民たちと種まきをしました。

この地区は被災直後に火災が発生し、住宅の大部分は焼失してしまいましたが、この公園の空間が火災を止めたといわれるところでした。やがて区画整理が始まる時には道路となる予定のところにヒマワリの種子をまき、道路になるところをヒマワリの花で示すことにしました。

2009年1月22日受付。

本稿は、2008年6月7日に行われた人間・植物関係学会2008年大会(滋賀大学教育学部)における公開講演の記録を、木島温夫会員がテープ起こしし、その原稿を講演者がチェックしたものである。

6月になると灘区楠丘町、芦屋市津知町、長田区海運町など各地でコスモスやヒマワリが発芽し育ち始めました。火災に遭い完全に空地になったところは大型機械で完全に整地されるのですが、野田北部のまちづくり協議会では、後の所有権争いが起こらないように、かつての家の基礎石は残すようにしていました。

区画整理事業が決定されていた訳ではなかったこの頃ですが、区画整理事業で道路になるという位置はそれが分かるようにとヒマワリの種がまかれました。まだ生活水にも困っている頃でしたが、そこに住んでいた人たちがヤカンなどで水やりをし、ヒマワリを大事に育てました。

この他、灘区のJR六甲道付近や神戸市東灘区の市場



第1図. 神戸市灘区楠丘町で種まき。1995年5月27日。



第2図. 神戸市長田区鷹取地区の大国公園で。1995年5月28日。



第3図. 神戸市長田区鷹取地区海運町の花のライン。
1995年7月18日。

跡、長田区大道などにはコスモス、ヒマワリの他、15種混合の種もまきました。長田区大道の職住混合の町工場跡地では、住宅の1階の工場床がコンクリートだったので、削岩機で植え穴を作りながらヒマワリの種子をまきました。

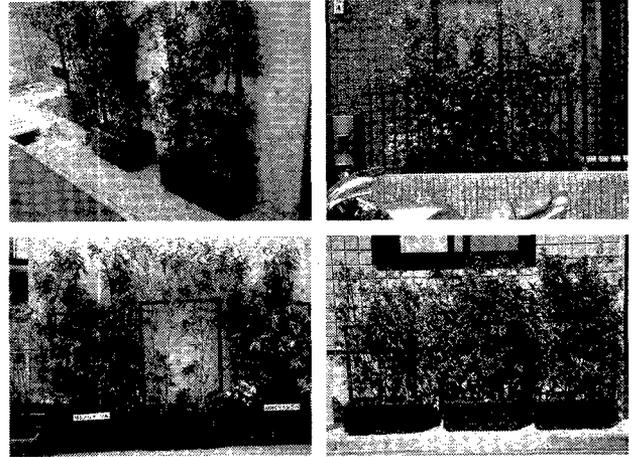
7月になると早くもコスモスなどが咲き始め、8月にはヒマワリも咲きました。これらの活動ではプロの方が選んだ種類の種をまきました。プロの助けが大きな力であったと思います。

この「ガレキに花を咲かせましょう」の計画は、悲しみにくれる人々のところに押しかけて花の種をまくことでしたので、拒否されるのでは、とはじめは心配していましたが、逆に被災者に励まされての活動となりました。前へ進むきっかけとなり、悲しみを超えて行くためにできること、傷を負った者が同じ思いでできること、それが花の種をまくことでした。

2. 震災後の緑花まちづくり支援

少し復興が進み、「家が建ったら木を植えましょう」と、まずは家の生垣作りから始めました。といってもそう簡単にはできるものではありません。1軒1軒家を訪ねて、生垣作りをお願いし、また、みんなで作った移動式の生垣を、家に持ち帰って置いてもらったりする活動もやりました。

開港5都市を中心とする水辺の町で開催するウォーターフロントサミットという会議は1988年に神戸から始まりましたが、1995年11月に沖縄で開催されました。そこにわが支援ネットワークのメンバーが招かれ、震災後の取り組みを話す機会を得ました。その場で神戸への支援が決まり、「阪神緑花再生プロジェクト支援奄美・沖縄委員会」から大量の花苗木が届けられることになりました。その後別の専門家のご縁で、愛知県一宮市の花苗業者のネットワークからも1回に4～5万ポットの花苗が年に2回、8年間、支援ネットワーク宛に無料で届けられましたが、わが支援ネットワークによる緑化活動



第4図. 移動生垣（神戸市灘区楠丘町）。



第5図. New Yorkのガレキ隊。2002年5月。

は限界を感じるようになり、造園の専門家達の緑花支援ネットワークとして「阪神グリーンネット」を発足させることになりました。

この頃のもう一つのエピソードは岡本のヒマワリです。東灘区岡本に住んでいた加藤はるかちゃんは、隣の一人暮らしのおばあちゃんが飼っていたオウムが好きで、毎日のように餌のヒマワリの種をやりに行っていました。ところがはるかちゃんは、あの大震災で崩れ落ちた天井の下敷きになって亡くなりました。その時のヒマワリの種子が地震で散乱し、その年の夏、この敷地に見事な花を咲かせました。これが「はるかのヒマワリ」といわれているものです。この地域の住民で結成された「岡本交友会」の方たちがこの種子を収穫し、来年も咲かせたいと「支援ネットワーク」とともに、岡本の地域に種子をまきました。東灘区の山手幹線道路沿いにまかれた種子は一本も抜かれることなく、大きく育ち花を咲かせました。

3. New Yorkにガレキ隊 2002年5月

2001年9月11日のニューヨーク貿易センタービルがテロで破壊されました。私たちはあのガレキの状況を見て、神戸と同じようにニューヨークにおいても花が心を

癒してくれるのではないかと、「ガレキに花を咲かせましょう」の支援をすることにしました。

阪神淡路大震災より以前に起こったサンフランシスコ大地震の復興について共同研究をしていたアメリカの研究者たちの尽力で、ビル崩壊現場から約300mのところにあるニューヨーク市役所の向いの公園の一角に花の種をまく許可を得ることができました。奇しくも神戸と同じ5月のことでした。

種子をまくだけでは花が咲くまで時間がかかるので、同時に花の苗も植えました。そして、次のような日英両語のメッセージを書いた看板を立てました。

「September 11, 2001, NEWYORK & January 17, 1995 KOBE Memorial」 「KOBE FLOWER GARDEN」 神戸花苑 この花苑は、阪神・淡路大震災で被災した神戸市民が、ひまわり・コスモスの種をまきました。これらの種は、1995年の震災の時、復興まちづくり活動「ガレキに花を咲かせましょう」で被災地を彩った花のもので、ひまわりは震災復興のシンボルとなりました。ニューヨークのマンハッタンの市民が、2001年の9/11テロから、心安らかに再生復興されるように、ひまわりとコスモスの花が咲くことを願っています。”

その後現場には行く機会がありませんが、1年草にも関わらず次の年にも花は咲いていたことを取材に訪れた新聞社の方が知らせてくれました。現地のNPOの人たちがその時預けてきた種子をまいて下さったのだと思います。

4. 中越大震災後の仮設住宅でのガレキ隊の活動 2005年6月

新潟県中越地震のあと、山古志村の人々のために建てられた仮設住宅。そこに兵庫県と神戸市から提供された花の種をまき、花苗を植え、仮設住宅の入口にはシダレザクラとヤマボウシの2本の木を植えました。その日は、山古志村の人々が田植えの準備のために地震後初め



第6図. 中越大震災後のガレキ隊の活動.

左上：仮設住宅団地入り口に苗木を植える

右上：シダレザクラ

左下：苗木の足下にコスモスの種をまく

右下：ヤマボウシ

て村の様子を見に帰られる日で、多くの住民はお留守でした。

仮設住宅では留守番のお婆さんが私たちの作業を窓からずっと見守っておられ、「春まで居らないかん」「花見ができるからたのしいやなあ」といわれました。春に花見をするということは、来年の春にまだ仮設に住んでいるということです。半年先にもまだ仮設からの転居が叶わないということも、「花見が楽しみ」といって下さったその言葉に、仮設住宅生活を経験したわれわれ神戸の者たちには、返す言葉がありませんでした。

花の種をまき、花苗を植え、木々を植えるにはるばる神戸から来た者を励まして下さったこの言葉は、そこに住まいる人々の心を言い表しているのではないのでしょうか。

阪神大震災から被災した人々を励まし、希望と勇気をもってともに前に進むことを目的として活動してきたわれわれ支援ネットワークは、神戸でも、ニューヨークでも、中越でも、被災者に励まされることになりました。